



・巻頭言……………1
・研究所活動報告……………2

・豆手帖 ⑤⑩……………3
・催し物案内等……………4



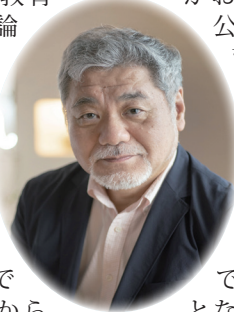
たぐいまれなる研究施設

民俗学研究所 所長 川田 牧人

民俗学研究所というのは、他に類をみない、きわめて成城らしい個性豊かな研究施設であると思うてきた。その理由の一つは、民俗学にとどまらず人文社会科学のさまざまな分野がひろく集って文化の総合的な研究がおこなわれる施設だという点である。所員の専門も、民俗学をはじめ文化人類学、日本史や東洋史などの歴史学、考古学、国文学や各国文学、美術史や芸術学、宗教学や社会学、社会心理学、教育学、経済史、比較政治学や国際関係論などバラエティに富んでいる。その諸学が民俗文化とそれに関連する分野の研究において交流を深めつつ、研究プロジェクトとして先端を切り拓き、外からみてもハッキリとわかるような顕著な研究発信をおこなってきた。

民俗学の傍らで文化人類学を学んできた私なども、大学の学部学生の際からこの研究所の存在だけは認識していた。学部時代をすごした大学では、民俗学と当時民族学といわれていた現在の文化人類学がひとつのコースを構成し、「民民コース」とよばれていた。指導スタッフの教師陣も両分野にわたっており、民研について話してくれる先生や、ご自分でも民研で文献研究をして論文にまとめられる先生などもいらっしゃった関係で、耳学問できたわけである。ただそういう特殊な教育環境で学んだからというわけではなく、隣接諸学を通して外部にアピールするというこの研究所の基本的性格によるところが大きいと感じている。

以上は研究・調査の側面だが、そのほかにも文献資料の保存や管理、視聴覚資料の収集・展示・公開、研究会や講演会、また定期刊行物の発刊などを通じた社会発信がなされ、さらにそれが成城学園の教育に繋がっているというのも、唯一無二の研究施設としての特色であろう。私が所員となった13年前、



当時の松崎憲三所長から、民研の研究プロジェクトには大学院生が加わるケースが少なからずあることをご教示いただいた。大学院生が研究プロジェクトに参加することは、彼らにとっては外部の研究者と研究交流できるよい機会になるとともに、研究プロジェクトにとっても若い推進力を得られるというメリットがある。また前任の小島孝夫所長の時代には、学芸員課程の学生の協力を得た資料展示がおこなわれ、資料収集や整理、展示や公開などの研究所の要となる事業が教育活動としても意義を持つという、大学付置研究所として理想的ともいえる形態が作られてきた。

このたび所長という大役を仰せつかったことは、これらの蓄積を継承発展させていかねばならないと考え、まことに身の引き締まる思いである。先にも書いた通り、私は所員となって今年でやっと13年目に入るところで、まだまだこれから皆様にご教示いただきながら、知見を広げていかなければならない途上にある。それに加えて今期の課題として、大学10号館の新規建設がいよいよ始まることにともない、成城学園全体の校地整備計画の大きな動態への対応がある。これからは学園全体の大きな変化に対応して体制作りと準備をおこなっていくという現実的な課題に向き合うこととなる。1991年に現在の4号館に移ってきて今年で35年となる研究所は、かなり長期に一つとところにあるため定番のロケーションのように錯覚しがちだが、そもそも1973年に開設された当初の場所が新図書館建設にあたり1987年に旧高校物理室へ引っ越しをするなど、時のうねりのなかで、しなやかに変化を遂げてきた。変化に適応して成長する柔軟な力は近年ではレジリエンスなどといわれるが、これからの民俗学研究所に求められる力であるにちがいない。（文芸学部教授）

研究所活動報告

◇新規プロジェクト紹介◇

令和8年度 研究プロジェクト

「中東欧における社会主義期のサミズダート（地下出版）と1989年以降のノスタルジー
— 体制転換前後における民衆の認識と社会の変化を解明する —」

研究代表者 福田 宏

中東欧（旧東欧）諸国は1989年の体制転換によって民主化されたものの、2010年代以降は、ポピュリズムの台頭や民主主義の危機が指摘されるようになってきている。だが、これは世界共通の現象であり、もはや旧共産圏だけの問題ではない。では、当時の民主化とは一体何だったのだろうか？民主化の過程で「ボタンの掛け違い」が生じたとすれば、それは何だったのか？この研究プロジェクトでは、人類学・歴史学・社会学・政治学の研究者が参画し、体制転換前後の社会の連続性について分野横断的に研究を進めている。例えば第二次世界大戦後前後の日本も同様だが、体制転換によって一夜ですべてが変わるというものではない。1989年前後の中東欧についても、政治経済の体制は180度変わったわけだが、社会そのものが丸ごと入れ替わったわけではない。本研究では、社会主義期におけるサミズダート（地下出版）と1989年以降における映画やテレビ、さらにはネット空

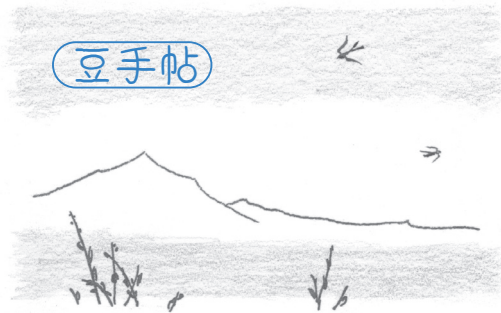
間における一般市民（民衆）の認識に焦点を当てることにより、政治や経済だけでは見えてこない民主化の実態を解明したいと考えている。本研究のメンバーは、所員の小澤正人、研究員の中井杏奈、坂田敦志のほか、研究協力者の河合信晴（大阪大学）、神原ゆうこ（北九州市立大学）、辻河典子（近畿大学）、松井康浩（九州大学）である。また、今年5月24日（日）14時～17時には、本プロジェクトのスタートアップ・イベントとして、国際基督教大学社会科学研究所等との共催により、国際シンポジウム「日本を映す鏡としての中欧：新自由主義、排外主義、民主主義の危機」を本学にて開催する予定である。このシンポでは、カナダ・トロント大学のアイヴァン・カルマー氏など3名のゲストをお迎えし、日本との比較も視野に入れつつ、中東欧における危機の内実を明らかにしていきたいと考えている。（所員）

研究所刊行物

『民俗学研究所紀要』第50集 令和8年3月25日発行 A5判 189頁

＜収録内容＞

- | | |
|-------------------------------------|-------|
| ・漁と商いのあいだ 一魚を売る漁師の民俗— | 川島秀一 |
| ・「取子」習俗をめぐる一 吞龍及び鬼子母神信仰を中心に— | 松崎憲三 |
| ・二つのミンゾク学再考 一柳田國男にみる翻訳解釈の揺れをめぐる一 | 板橋春夫 |
| ・民具はいかにして文化財になったのか 一有形文化財「民俗資料」の誕生— | 榎美香 |
| ・武蔵国造の始祖系譜に関する再検討 | 渡部敦寛 |
| ・東京都立中央図書館蔵「火之用心珍書」について（一） | 小沢詠美子 |



日本語本来のかながき和文には、句読点のようなものはなかった。個々の語句は各々かなの連綿によってまとなり、それらは文脈次第で微妙に長短の間があげられて綴られるので、誤解の心配はなかった。

豊臣秀吉の御伽衆として有名な曾呂利新左衛門がある時、町内の寄合いの席で何かの拍子に、文章には句読点が必要だと言った。驚いて顔を見合せた一同も、声の大きな仏具商人が、そんなものは全く不要だと強硬に主張したので、皆が賛意を表した。

新左衛門大いに恐縮して、先程の自説を取り消したが、散会時に、件の仏具商に機嫌を取るように、紙片を渡して、この品を作ってくださいませんかと注文した。「ふたへにまげてくびにかけるじゅうず」だった。気を良くした仏具商、お安い御用だと二つ返事で引き受けたのだが。彼がその数珠を、「二重に曲げて、首に」掛けるものを作っても、「二重に曲げ、手首に」のものに拵えてきても、注文とはずいぶん違うものだ、突き返される筈だったのだ。

今度は英国の話。ある名門小学校に、視学官が視察に訪れることになり、模範授業を校長先生自らが披露した。終了後、視学官は、その授業を大いに褒めたが、ただ、校長先生が授業の中で、文章には句読点が大事だと強調した部分に触れて、句読点はどうでもいいでしょうと、そこは批判した。

すると校長先生、やおら黒板に、すらすらとこう書いた。“The inspector said the principal was a fool.”「視学官は言った校長は愚か者だ」と誰にも一目瞭然分かるこの文章に、生徒一同、大歓声を挙げ、中には机を敲き、足を踏み鳴らすお調子者まで出る有様。いやー、愚か者なんて言いませんよ、と大いに恐縮する視学官。……しばらく教室内の喧騒を眺めていた校長先生、黒板に向き直るや、この文章の二箇処に、読点を打った。

“The inspector , said the principal , was a fool.”
「視学官は、と校長は言った、愚か者だ」と。
途端に教室内はシーンと静まり返った。これも誰にでも、その意味は直ぐに分かるのだから。読点に挟まれた部分は挿入句となって（だから主語と動詞の位置が逆になっており、これが正当な語順）、文章の意味が逆転してしまった。この単純な例が示唆するように、欧文でも勿論、句読点は重要である。

句読点と人生

—より良き生涯へ向かって—

本学名誉教授 筑波大学名誉教授 森田 孟

先刻のかな文に限らず、現代の漢字かな混じり文でも、複雑な内容になればなる程、文意の正確な伝達に句読点が欠かせないことは、もう例を挙げるまでもない周知の事実であろう。

思うに人生にも、節目節目の句読点は、必須ではなかっただろうか。昔、聖人孔子が、述懐していた。「吾十有五にして学に志す、云々」と。「私は15歳の時に学に志し」（それで15歳を〈志学〉と称す）、「30にして立ち（30歳を〈而立〉）、40にして惑わず（40歳を〈不惑〉）、50にして天命を知る（50歳を〈知命〉）。60にして耳順い（60歳を〈耳順〉）、70にして心の欲する所に従えども矩を踰えず（70歳を〈従心〉という）」と（『論語』為政）。

74歳まで生きた孔子による、我々には常に馴染みの句読点だが、身近なものでは他に、還暦（60歳）、古稀（70歳）、喜寿（77歳）、傘寿（80歳）、米寿（88歳）、卒寿（90歳）、白寿（99歳）、などと、それぞれ理由付けしながら慣習として祝う句読点がある。

シェイクスピアも異なった視点からだが、類似の有名な句読点を示してくれた。

『お気に召すまま』As You Like It (ll.vii.136-166)に現れるもので、謫居中の前公爵に随侍する貴族ジェイクイズのその科白は、「人間世界は悉く一つの舞台です」に始まり、「その全幕は七つの時代から成る」と、滔滔とまくしたてられる。その七つの時代とは、赤ん坊、小学生、恋人、兵士、裁判官、道化老人、そして最後は、第二の幼年時代で、それは「歯なし、眼なし、味なし、何ものなし」と締め括られている。各時代には、それぞれの特色が簡潔に辛辣巧妙な例を挙げて描出されている名文である。

これまで見てきた句読点は、だれもが大方一般的に経験するだろうものだが、人には誰かとの出会いや、出来事との遭遇、見・聞きした事など、各自にそれぞれ特有の句読点も経ながら、新生しては生涯を送ってゆくのではなからうか。

柳田國男翁の人生でも、その経歴を一覧しただけでも、少年時代から幾度か重要な句読点が打たれては、その都度脱皮を重ねて、輝かしい生涯の全うに到ったことが知られるのである。

《民俗学研究所公開講演会》

関一敏氏

恐怖・笑い・感覚 一俗信論コトハジメー

予約不要です
直接ご来場下さい

日 時：令和8年6月20日（土）午後1：30～3：30

会 場：成城大学3号館1階 311教室

〔講演者略歴〕

1949年 神奈川県生まれ

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退、パリ大学IV博士課程修了

現在、九州大学名誉教授

〔おもな著書〕

『聖母の出現——近代フォーク・カトリシズム考』（日本エディタースクール出版部、1993年）

『民俗のことば』（編著）（朝倉書店、1998年）

『新しい民俗学へ 野の学問のためのレッスン26』（共編著）（せりか書房、2002年）、等。

《所員研究例会》

日 時：令和8年7月9日（木）午後2：40～5：00

会 場：成城大学 2号館1階大会議室

発表者・テーマ（発表順）

小澤正人氏（所員）「中国古代における死生観の展開」

榎原史子氏（研究員）「聖徳太子への祈りと四天王寺—平安時代の聖徳太子信仰—」

◇ 人事

・民俗学研究所所長：川田牧人 文芸学部教授（令和8年4月1日発令 新任）

編集後記

民研ニュース152号をお送りします。巻頭言には、今期より新たに就任された川田牧人所長から「たぐいまれなる研究施設」と題してご寄稿いただきました。研究所の多角的な個性を再確認し、新校舎建設に伴う変化を「レジリエンス」を持って乗り越えようとする力強い決意が綴られています。活動報告では、福田宏所員より新規プロジェクト「中東欧における社会主義期のサミズダート（地下出版）と1989年以降のノスタル

ジー」について紹介いただきました。体制転換前後の民衆の認識を追うこの研究は、現代の民主主義の危機を考える上でも極めて意義深いものです。豆手帖では森田孟名誉教授から、人生の節目を「句読点」になぞらえた含蓄あるエッセイをいただきました。今年度の前期にも公開講演会や例会など、知的好奇心を刺激する催しが多く予定されています。興味がある方はぜひ足をお運び下さい。最後になりますが、ご執筆いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

民俗学研究所ニュース No.152



令和8年4月24日発行

編集兼発行人：成城大学民俗学研究所主事 小澤 正人

〒157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20

TEL：03-3482-9097・9098 Fax：03-3482-7763

mail：minken@seijo.ac.jp